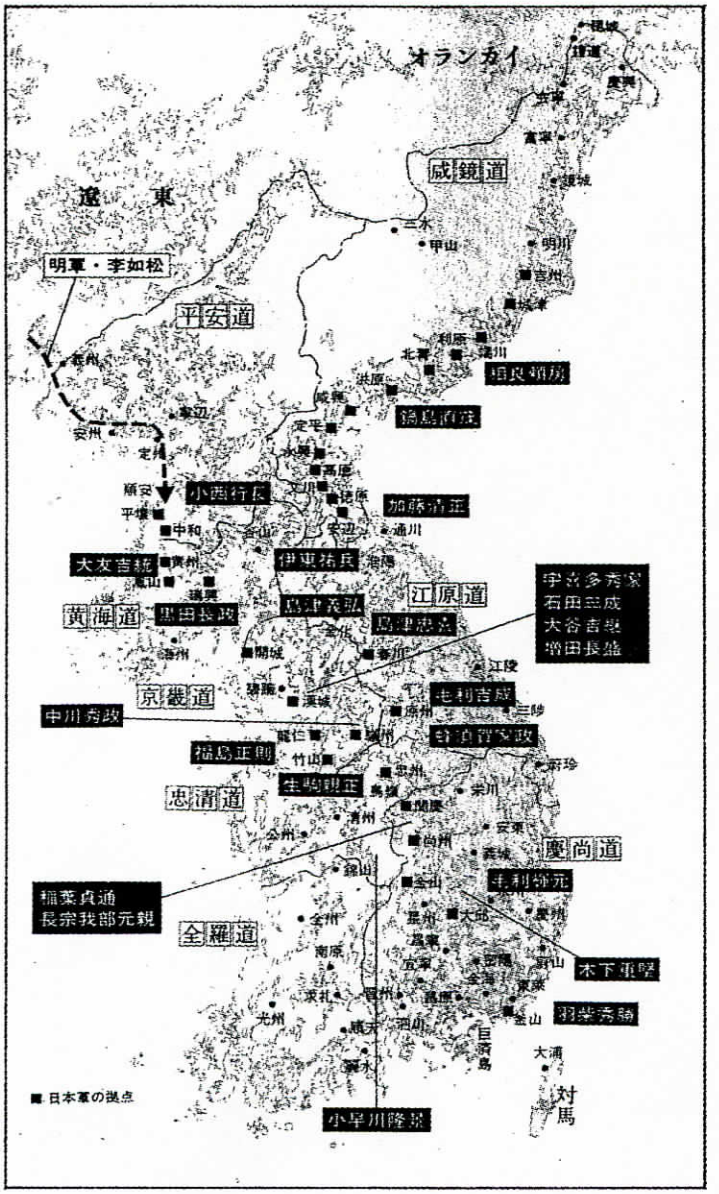
五月一日小西行長、二日に加藤清正らの軍勢が漢城（ソウル）に入城する。日本の軍勢は僅かに二十日間で、五百キロを侵攻し、都城の漢城を陥落させた。

日向記には、

「祐兵主、五月二日ニ釜山浦ニ着岸シ玉フ、五月五日、毛利吉成ラト、セヒタント（場所不詳）ニテ撫斬ス、（飫肥勢）モ五十余人ヲ討捕ル。諸将は漢城に十日、十一日、十二日に屯セリ。二十日程ノ逗留ニテ評議アリ」

とある。

（八道国割・地図参照）



※　「太閤秀吉と名護屋城」（鎮西町史編纂委員会）の年表には、四月十八日四番隊毛利吉成・伊東祐兵らは慶尚道安骨浦に上陸し、金海を攻めるとある。

※　延岡市史（石川恒太郎著）には、金海、昌原を経て、清州城を陥れ漢城に進んだとある。

また、日本の軍勢の八番隊までは、五月八日までに漢城に入城したとあることから、伊東勢はさしたる抵抗も受けず、破竹の進軍をしたことが伺える。

そして、八道国割の評議が行なわれたのである。

八道国割

五月初旬、在朝諸将は漢城会議を開き、朝鮮統治の分担を決定した。平安道、咸鏡道、黄海道、江原道、京畿道、忠清道、全羅道、慶尚道の八つに朝鮮を分割し、民衆の掌握と租税の徴収を目的とした。

朝鮮の総石高を千百九十二万四千四百六石とみなしている。

七月になると、八道分割の評議に従って、伊東祐兵の属する四番隊は漢城を出発し、江原道に向かった。

日向記に、

「江原道ノ内通川ト云処ニ祐兵主モ諸将共ニ都ヨリ発向シテ令放火国中ヲ押通ル、同七月又京畿道ノ都を出玉フ、夫ヨリ又江原道ノ内テルウン（鐵原）ト申ス所ヲ伊東民部大輔陣所ト定メ堅固ニ守護セリ」

とある。

また、日向纂記にも、

「七月ニ至リテ、又手分アリテ江原道ノ内鐵原ト云フ所ニ陣所ヲ定メラル。王城（漢城）ヨリ道程三十里ノ地ナリ」

とある。

伊東祐兵は陣所を鐵原（チョルウオン）と定める。四番隊の諸将では島津義弘が金化（キムハ）、島津忠恒が春川（シュンチョン）、毛利吉成が原州、秋月種長が平昌に布陣した。

飫肥勢は鐵原に陣所を構え、朝鮮兵と戦火を交えている。

日向記にある連川（レンテン）城（鐵原より南に十六キロ）攻めでは、

「伊東民部大輔祐兵主大河ヲ越レンテン（連川）城ヲ乗落シ、朝鮮人ヲ追払ヒ八十余人討捕テ凱歌ヲ挙ゲル」

とある。

飫肥十三代藩主伊東祐相（スケトモ）が詠じた「連川行」という長編の漢詩が日向纂記にある。

要約すると、

「文禄元年春三月、島津勢が深い連川を渡れず引き返した。その状況を見た伊東祐兵は秀吉公より拝領のからくり竜の槍を手に、率先して渡河に成功し、伊東勢だけで連川城を攻略した」

（城下町飫肥ガイド・吉田常政訳）

続いて、麻田（マテン）城（鐵原より南西に十六キロ）攻めでは、

「祐兵主陣所へ朝鮮人（が攻め）懸ヘキ企アル由相聞ヘシカハ、此方ヨリマテン（麻田）城ニ夜攻アリテ、敵七百余人討捕也」

また、朔寧（シャクネン）城攻めについては、

「十月十八日、伊東一手ニテシャクネン城（朔寧・鐵原の西五キロ）ニ夜掛ヲシ追払、敵千人ニ及討捕、其上朝鮮国ニテ三人ノ大将ノ内観察使（かんさつし）ヲ討捕ナリ、此日荒武左官（そのすけ）討死、此外手負十五人・・・。観察使頸ヲ取テ都へ上セ玉フ。其誉軽カラス」

朝鮮統治の失敗

八道国割は僅か三ヶ月後には破綻を見せ始めた。

第一の原因は、「（村々には）男子相無く、女子・童・老人のみという状態で、年貢を取ろうにも春方以来騒乱に及び立毛（たちけ）（稲の生育）はか細く、百姓ども多くは逃げ隠れ、荒廃甚だしく貢賦（年貢などの徴収）の見込み立たず」となったこと。

第二は朝鮮半島に上陸した日本の軍勢に兵糧、弾薬などが十分に輸送できない状況になったこと。

それは、李舜臣（イスシン）の率いる水軍に制海権を奪われ、「兵糧船数多（あまた）敵の海賊ドモ（朝鮮水軍）ニ攻メラレ、大破、海中ニ沈ミ」とあるように輸送ルートが不安定なものとなったからである。

加えて、釜山浦に輸送船が無事に到着しても、釜山と漢城を結ぶ補給路は、「百石ノ兵糧繰リ入レニ数十人アイカツギ、警護ノ人数モ百人、二百人ト指シ添エル」とあるように義兵（一揆輩）の決起、抵抗にあっていた。

日本の軍勢が侵略を開始してから半年後の十一月には、「都（漢城）ノ兵糧モ来春マデハ保チ得ズ」という状況に陥った。

文禄二年に入ると、戦局は日本の軍勢にはますます不利となった。一月七日に平壌が陥落する。小西行長を旗頭とする一番隊は統治していた平安道を捨てて、一斉に漢城へと撤退した。

一月二十六日には漢城城外の碧蹄館（ペクチェクアン）で、日本勢五万と明・朝鮮軍五万が激突した。

日本の軍勢は辛くも勝利し、漢城を死守することができたものの、大陸の寒気、兵糧不足などにより、日本の軍勢の中に厭戦（えんせん）気分と撤退願望が充満していた。

この時期の兵員調査では、平壌に攻め入った一番隊・小西行長らの軍勢は、一万八七〇〇から七四一五と、六〇パーセントを失い、オランカイまで攻め上った

二番隊の加藤清正らの軍勢は、二万二八〇〇から一万四四三二と、

三十六パーセントを失っている。
また、伊東勢の属した四番隊は、一万四〇〇〇から六〇八二と五十六パーセントの兵を失っている。
日本の軍勢は一年足らずで渡海軍勢の四十パーセントにあたる七万五〇〇〇余を失っている。
日向記では荒武左官、大内甚吉、湯地平吉らの討死しか伝えていないが、足軽、人夫などには病死、戦病死が多かったことも想定される。
日向記に、
「伊東祐兵主ハ仮屋満次ヲ呼ビ、汝ノ才覚ヲ以テ筏を組ミ、モクソ川ヲ渡シ、大豆ヲ求メ帰ルベシトノ由ナリ。
仮屋ハ大豆二十五石ト郷民十八人ヲ捕へ帰ナリ」
とあるように、日本の軍勢を襲った艱難の第一は兵糧の不足である。
日本の軍勢が朝鮮に留まるには、兵糧を調達するために略奪を行なうとともに、毎日の食事を切り詰めるしか手段はなかった。
将兵の食事は、都（漢城）でさえ、一月は一日に二度の雑炊、二月、三月になると日に一度の粥、それも粥の中に野木の葉を混ぜて食いつないでいたとある。
満足な食事もとれないため、「地獄の餓鬼のごとく痩(や)せ衰え、病人際限なし」という状況に陥っていた。
もうひとつの艱難は大陸の寒気であった。「薄衣ノタメ手寒気ニ焼ケクサリ、指先ノ自由ヲ失ウ者数多アリ、寒死（凍死）スル者後ヲタタズ」とある。
日本の軍勢が朝鮮に上陸した時は旧暦の四月中旬であったので、将兵は冬支度をしていなかった上に、渡海した将兵は九州、中・四国勢が大多数だったので、積雪や吹雪を経験していなかったのである。
また、将兵の履く草鞋が寒気を通し水を吸うことからその苦痛は言語に絶し、凍傷にかかった、多くの兵士は足の親指をなくしたと伝えられている。
宣教師のフロイスは、「戦死者はわずかで、そのほとんどは病死・凍死・餓死であった」と書いている。
日向記に
「（文禄二年）二月、伊東祐兵主都ヨリ一里アル松山城ニ在陣…。島津義弘モ二月金化ヲ開陣シテ慶尚道ノ巨済島に在番セル」
とある。
このことから、文禄二年二月以前に、伊東、島津勢も江原道を放棄したことが伺える。

漢城から朝鮮南部への撤退

文禄二年四月十八日、これ以上の漢城駐留は無理として、日本勢は一斉に釜山に向け撤退を始めた。
平壌、漢城からの撤退の際も日本の軍勢は傷病兵を置き去りにしている。
日本軍勢は釜山城を中心に慶尚南道の沿岸の十八城に軍勢約七万八〇〇〇が駐屯した。
日向記には、
「清舘（靖化）御在陣ノ時蔚山へ鴨狩ニ伊東兵右衛門ヲ遣ワス」
「コモウト城ヲ攻メ、敵三百人討捕ル。夫ヨリ陣ヲ退テ、釜山浦ノ内熊川城ニ在陣」
とある。
また、日向纂記には、
「文禄二年五月、朝鮮ト和睦ノ扱ヒアリシ後、日本ノ諸軍勢残ラス王城を引退ク、報恩公（伊東祐兵）ハ釜山浦ヨリ十三里北ニ當リ比羅牟（地名審ナラズ）ト云フ処ニ陣セラル」
ともある。
文禄二年五月一日、豊臣秀吉は豊後府内の大友義統、肥前岸岳の波多信、薩摩出水の島津忠辰を改易とした。